

1、目は心の窓



(桜花の下で有田家一同)

その昔、いつの頃からか、

「目は口ほどに物を言う」、

との諺が人口に膾炙（かいしや）（話題に上って知れ渡ること：『広辞苑』）してきた。目は心の窓で、何もしやべらなくてもいい。目には表情があり、言葉にできなくても目の表情で気持ちは伝わるものだ。

2015年11月19日（木）

それは、退院してからまだ3日目のことだっ

た。手伝いに来ていた孫の由希が、

「おばあちゃん、猿も木から・・・あとなに？」。

と聞いたら、「オチル」とこたえたのである。

これは、大きな波を描いて起伏する瞬間的精神現象だったかもしれない。が、それでも、まだ以心伝心（しんしん）（思うことが言葉によらず互いの心から心に伝わること：『広辞苑』）の世界にいる事実を示している。

会話のない一日は長い。気が遠くなるほど長い。

ときに、気分転換をはかって、

「有田和子さん、有田光雄です。パパですよ。66年間いっしょに生きてきました。これからも頑張つて生きていきましようね。」

と、少しおどけながら話しかけると、かすかに表情がゆるんでくる。

ながい長い共生の記憶は底深く生きているのだ。悲しくなる。

毎週、火曜日に訪れる宮崎久美看護師は、『療養手帳』の3月8日付けに書いている。これは、二人共に熱発、闘病数日後のことである。

「ご主人の体調が今ひとつ思わしくなく心配されています。ご主人が室内をうろうろされていると、ずーと目で追いついておられます。ご本人もまだ本調子ではなく表情もぼんやり。だが、胸の方は痰もなく両肺もクリアでした。」

何にもしやべらなくても、わたしには、

「パパ、どこにも行かないでそばにいてね。いつも苦労かけてゴメンね。体は大丈夫？無理しないでね。しんどいけど、わたしも頑張るからね。」などと、優しく語る声なき声が聞こえてくる。